

岐阜県郡上市におけるユキバタツバキの探索・収集

1. はじめに

ツバキは、日本ではおそらく最も身近で、馴染み深い常緑広葉樹のひとつです。他の植物の花が少い冬から春にかけて、野生の植物としてはポリウムのある花を咲かせることから、その鑑賞を目的とする園芸品種が多数作出されてきました。また、かつては材が緻密で摩耗に強いことから、工芸品や細工物などに使われていました。種子を絞った油は、ツバキ油として現在でも様々な用途に利用されています。

2. ヤブツバキとユキツバキとその雑種

我が国には、ヤブツバキ (*Camellia japonica*) とユキツバキ (*C. rusticana*) の2種類のツバキが自生しています。ヤブツバキが本州の主に太平洋側と四国、九州、南西諸島に分布するのに対し、ユキツバキは本州の日本海側の秋田県から福井県・滋賀県にかけての多雪地の山地に分布し、両種の間には樹形や花や葉の形態に違いがみられます。

ヤブツバキとユキツバキの分布の境目では、時折、両者の自然交雑によってできたと考えられる中間的な形態をもったツバキが見られ、ユキバタツバキ (*C. × intermedia*) と呼ばれています。ユキバタツバキでは花卉の枚数や形状、色彩などの変異が大きいことが知られており、日本海側地方に伝わるツバキの園芸品種の主要な起源のひとつであったと推測されています。新品種開発の基盤となりうるポテンシャルを今なお秘めたユキバタツバキは、重要な遺伝資源であるといえます。

3. 岐阜県郡上市のツバキ

日本海側の多雪地では海岸近くにヤブツバキ、山地にユキツバキが生育していることが多く、富山県や新潟県の有名なユキバタツバキの自生地は、両種が接する低山に位置しています。一方、岐阜県の日本海から遠く離れた内陸部に位置する郡上市でも、どちらの種ともつかないツバキが自生していることが知られており、これまで、地元の有志の方々による調査・保全活動が行われてきました。周辺地域にはヤブツバキのみが生育しており、富山・新潟の自生地とは成立の経緯が異なる

可能性があります。そこで、私たちは郡上市のツバキが本当にユキバタツバキであるかを確認するため、調査・分析を行いました。

EST-SSRマーカーおよび葉緑体のSSRマーカーを用いた遺伝分析では、当地域のツバキの多くは中部地方のヤブツバキに近いことが示されたものの、ユキツバキとヤブツバキの中間の遺伝的性質をもつ個体もかなりの割合で確認されました。

また、開花期に一部の自生地を訪れたところ、雄しべの花糸が基部で強く合着し淡黄色を帯びるなど、上記2種の中間的な形質をもつ花をつける個体が多数観察されました。さらに、同じ林分内であっても花卉の形態の多様性がきわめて高いことが分かりました(図-1)。

以上の結果から、当地域に生育するツバキの中に、ユキバタツバキが含まれることが示唆されました。

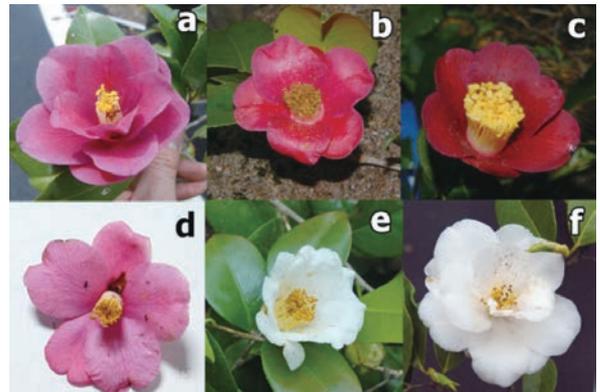


図-1 岐阜県郡上市で確認されたユキバタツバキの花の多様な形態。a) 紅紫色の八重咲き。b) ~ d) 濃紅紫色、暗赤色、淡桃色の一重咲き。e) 白色の一重咲き、花糸の黄色みが強く基部があまり合着しないなど、特にユキツバキに近い性質をもつ。f) 白色の八重咲き。

4. さし木による増殖

花の観察と並行して、花の形態が特徴的である個体を中心とした10本のツバキから採穂し、穂木を林木育種センター構内の温室にさし付けました。ヤブツバキ・ユキツバキは日本の広葉樹の中ではさし木が容易なグループに入り、高い成功率が見込まれます。

今後は、得られた増殖苗を遺伝資源として構内にて保存し、種間雑種の研究に役立てていく予定です。(遺伝資源部 保存評価課 大谷雅人)